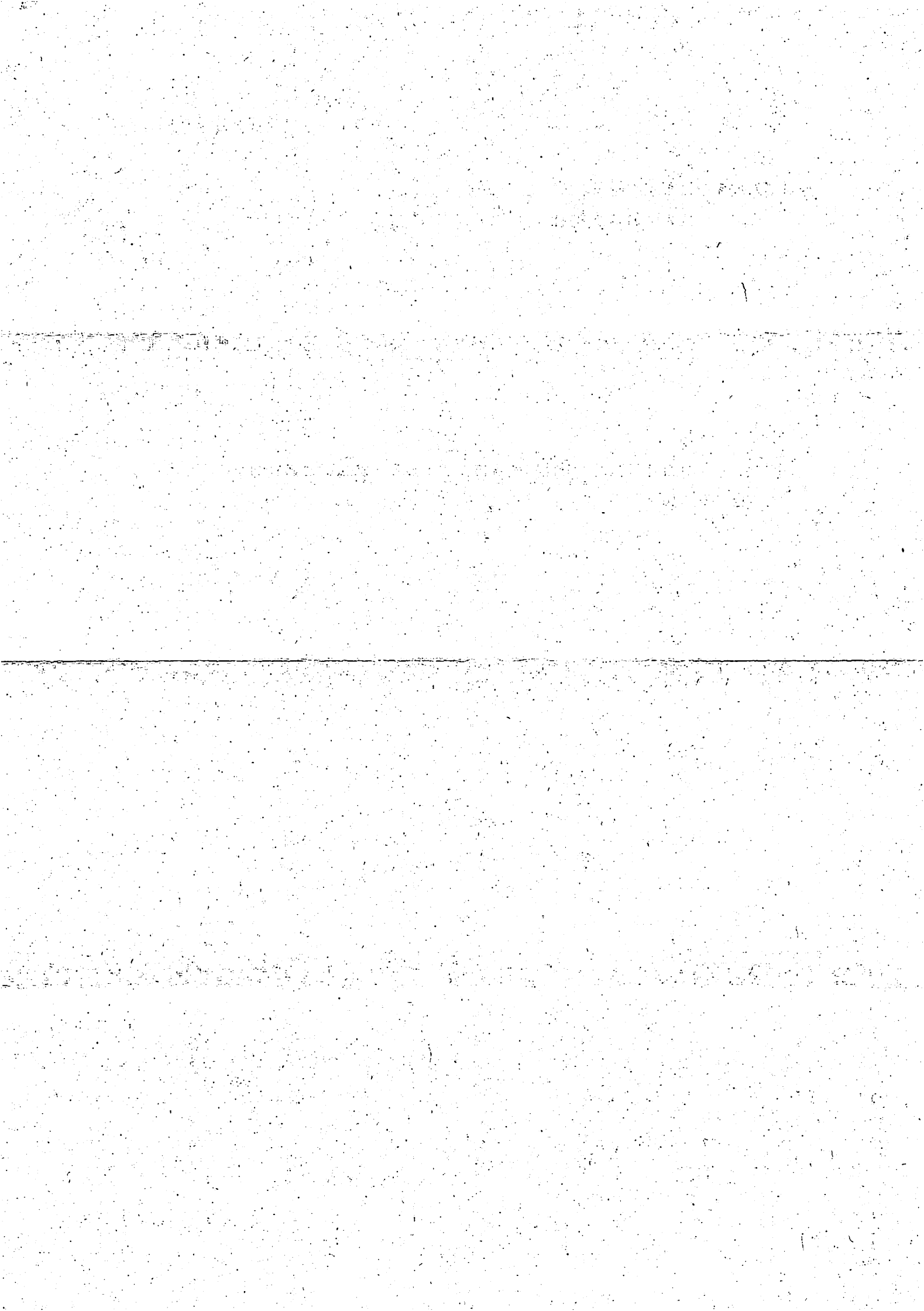


平成30年9月18日

野村ダム放流を検証する住民の会
代表 和氣數男 様

国土交通省四国地方整備局
野村ダム管理所長

平成30年9月4日付けの公開質問状につきまして、別紙のとおり回答いたします。
ご査収ください。



平成30年9月18日

野村ダム放流を検証する住民の会からの質問状に対する回答

9月4日付のご質問について、以下の通り回答します。

1 最大流入量の予想とその時期の予想

平成30年7月6日19時の段階で、豪雨による野村ダムの最大流入量が約いくらずで、最大流入量になる時間がいつになると予想していたか。

同月7日の2時の段階ではどうか。午前4時の段階ではどうか。午前5時の段階ではどうか。

(回答)

野村ダムでは、気象会社から提供される48時間後までの降雨の予測をもとに、ダムへ流入する量を予測しています。7月6日19時の予測では最大流入量が6時40分に毎秒589立方メートル、7月7日の午前2時の予測では最大流入量が7時40分に毎秒990立方メートル、同日午前4時の予測では最大流入量が8時40分に毎秒1,096立方メートル、同日午前5時の予測では最大流入量が6時20分に毎秒941立方メートルでした。

2 治水容量の変更について

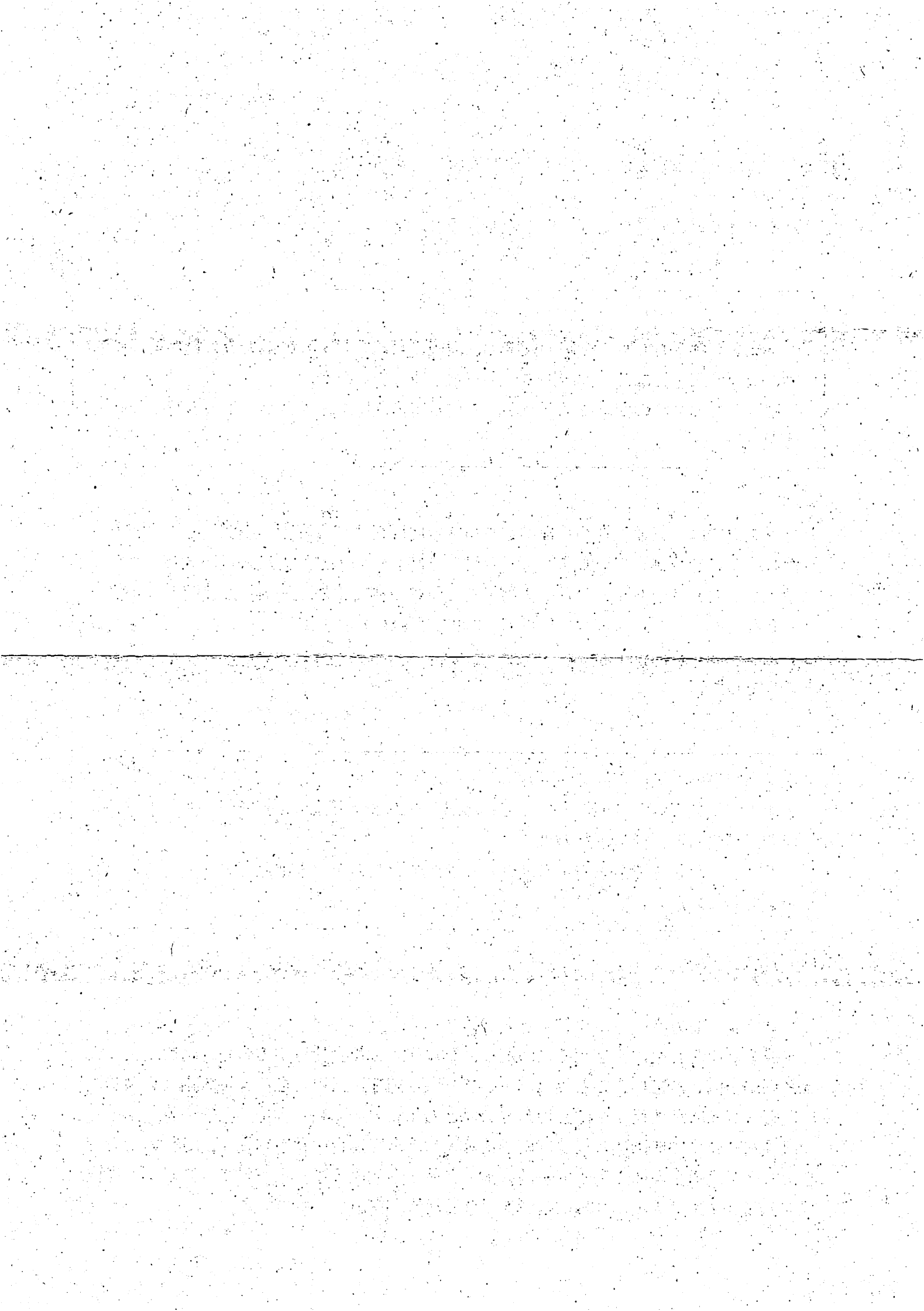
治水容量を250万トン増やしているが、ダム事務所独自の判断か、四国地方整備局の了解のもとに行われたのか。

どのような根拠で治水容量を増やすことができたのか。規則などの法令上の根拠を示してもらいたい。

(回答)

野村ダムは、洪水調節容量として350万立方メートル、灌漑や上水道の利水容量として920万立方メートルを有する多目的ダムです。

平成30年7月豪雨を迎えるにあたり、気象庁、気象会社等からの各種情報により大きな雨が予測されていたことから、少しでも洪水調節に活用できる容量の増大を図るため、野村ダム管理所長が、四国地方整備局とも相談の上、利水容量(灌漑)の所有権を持つ農林水産省中国四国農政局及び南予用土地改良区連合、利水容量(上水道)の所有権を持つ南予水道企業団に利水容量内の水をダムから放流する了承を得て、野村ダム操作規則の第22条第1項第3号に基づき、事前放流を実施したものです。



3 最大流量をカットして、放流量を減少させるのがダムの操作の目的だと思えるが、リアルタイムダム諸量一覧表からみると、平成30年7月7日7時40分の最大流入量毎秒1941.41トン毎秒1797.25トンにカットしたこと（毎秒144.16トンのカット）であるとみていいか。

(回答)

野村ダムの防災操作（洪水調節）の目的や効果は、必ずしも最大流入量と最大放流量だけで表現するものではありませんが、最大流入量は7月7日午前7時40分の毎秒1,941.73立方メートル、最大放流量は同日午前7時50分の毎秒1,797.25立方メートルです。（最大流入量と最大放流量は同じ時刻ではないため、その差を洪水調節量と表現することはできません）

4 治水容量を増やす以外に、本件放流に関して、操作規則を変更して運用した事項はあるのか。あれば、それはどのような運用についてか。

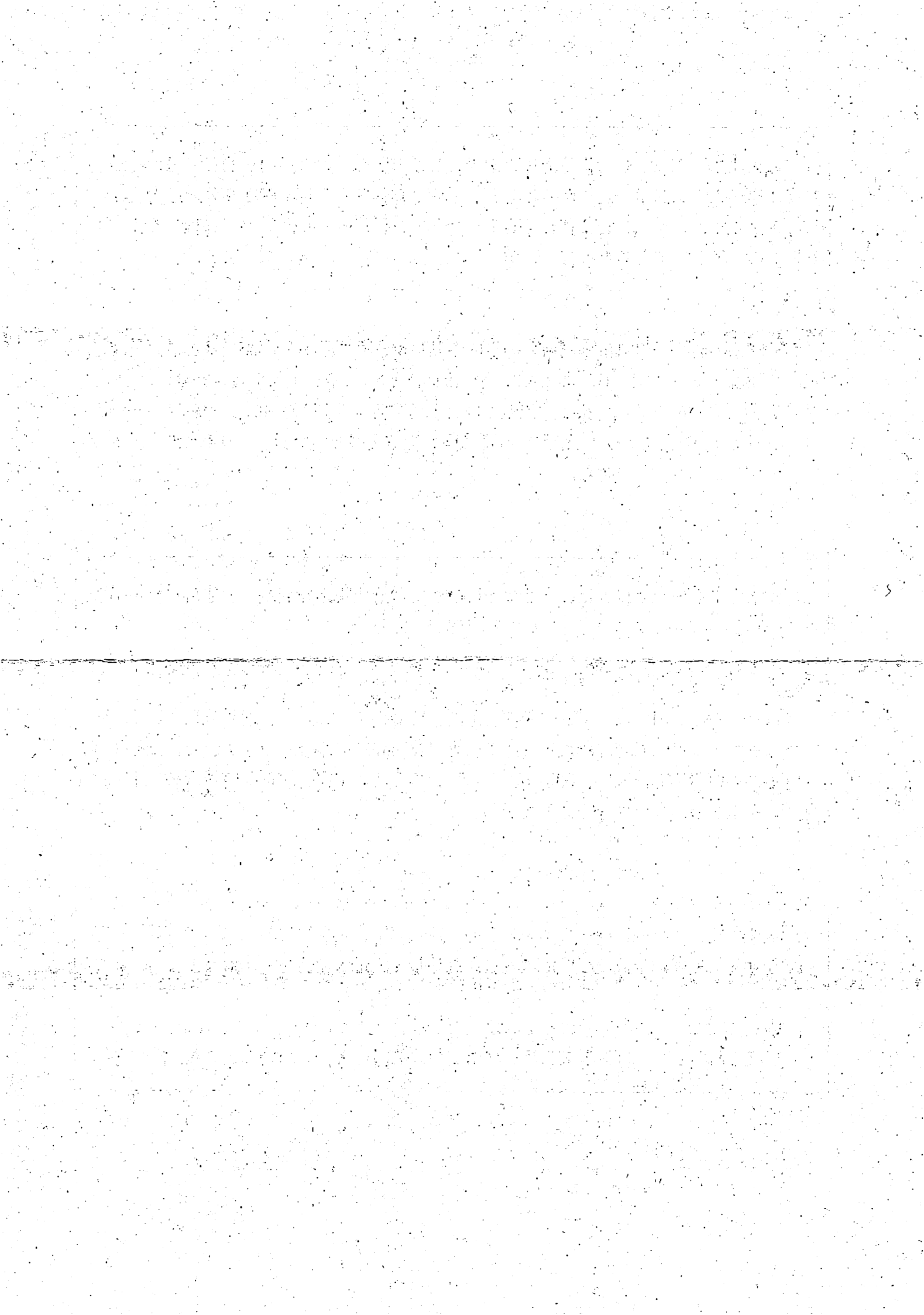
(回答)

野村ダム操作規則には、ダムの操作に加え、関係機関への通知、記録等についても定めています。野村ダム管理所長から西予市野村支所長へのホットラインなど、操作規則に定めのない連絡も行っていますが、ダムの操作に関しては、事前放流を含め、全て野村ダム操作規則に基づき行っています。

5 本件放流に関して、操作規則を弾力的に運用して、早期にもっと多くの水量（毎秒700トン程度）を放流して治水容量を確保して、最大放流量を少なくすることについて、四国地方整備局と協議をすることはなかったのか。

協議をしなかったとすれば、なぜ協議をしなかったのか。

協議をしたとすれば、どのような理由で弾力的な運用をしないことになったのか。



6 操作規則を弾力的に運用して、早期にもっと多くの水量（毎秒700トン程度）を放流して治水容量を確保して、最大放流量を少なくするため、南予水道事業団と協議をすることはなかったのか。

協議をしなかったとすれば、南予水道事業団も事態を理解して放流を承諾したと思えるのに協議をしなかったのはなぜか。

(5及び6の回答)

野村ダム操作規則は、関係行政機関との協議や愛媛県及びダム使用权者への意見聴取を行った上で定めることとしており、平成8年の操作規則変更の際にも、法令に基づき、関係行政機関との協議や愛媛県及びダム使用权者への意見聴取の手続きを行っています。

ご指摘の「操作規則を弾力的に運用」の意味するところが必ずしも明らかではありませんが、「操作規則と異なる操作」ということであれば、そうした操作を実施することは適切ではありません。

7 放流により氾濫し、野村町の市街地が浸水により、住民の生命に危険を及ぼすことについて、ダム事務所が予想したのはいつの段階か。

(回答)

住民の生命の危険の有無は、避難状況によるところが大きいです。当時、野村ダム管理所では避難状況を把握していなかったため、予想することは困難でした。

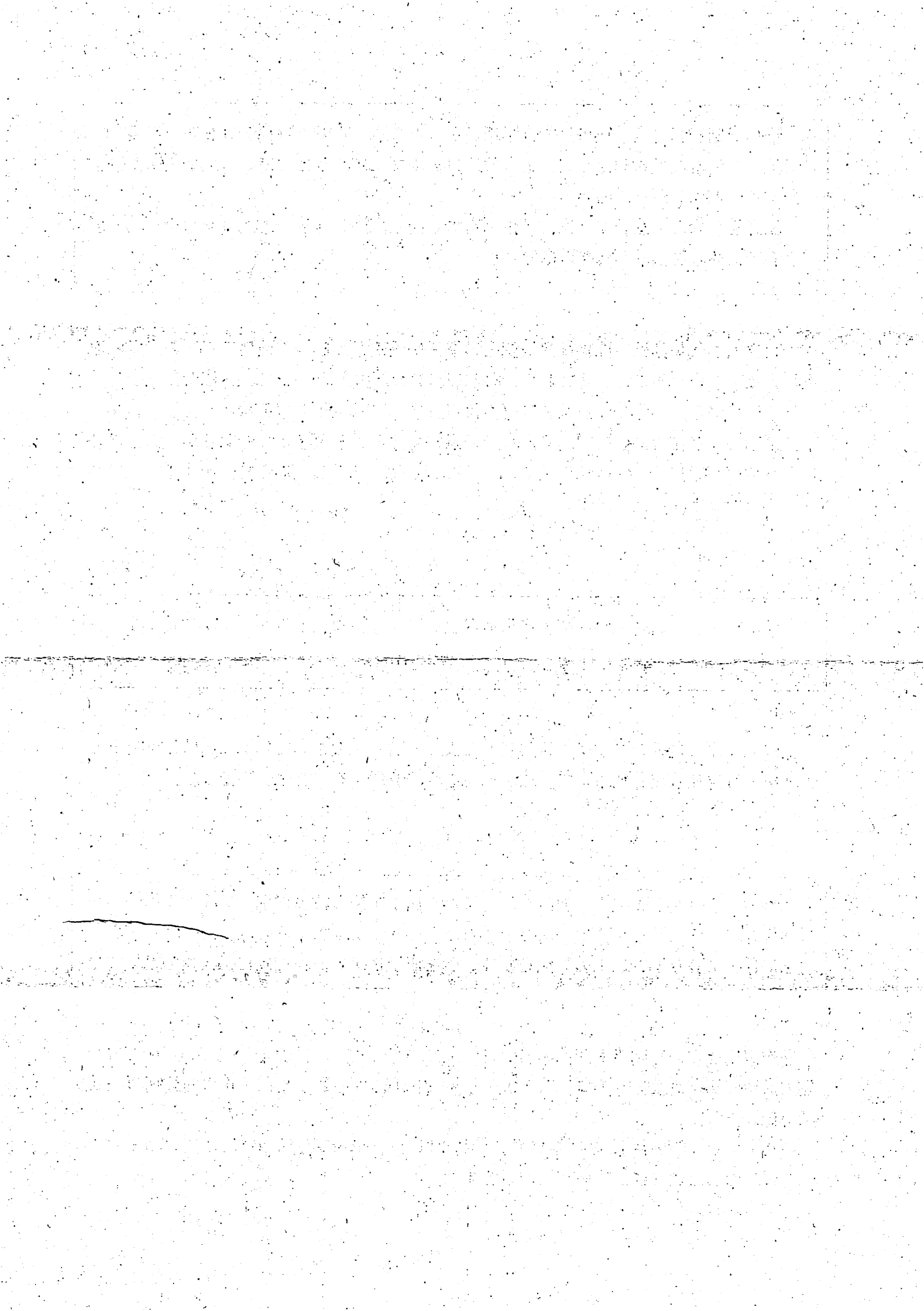
8 毎秒1300トン以上の放流をすることを西予市等の関係機関に伝えたのはいつか。具体的にどのような方法で、また伝え方としてどのような文言で伝えたのか。

毎秒1700トン以上の放流をすることを西予市等の関係機関に伝えたのはいつか。

(回答)

操作規則に定めた関係機関への通知をFAXで行ったことに加え、7日の6時8分に、最大放流量の予測値が毎秒1,750立方メートルになることを西予市野村支所長に電話で伝えました。

また、予測値が毎秒1,300立方メートル以上になる時点は、毎秒1,750立方メートルになることを伝えた時点と同じです。



9 リアルタイムダム諸量一覧表では、流入量よりも放流量が少ないのにダムの水量が減っている時間帯がある。これはなぜか。この平成30年7月7日においても南予水道事業団へ配水していたのか。していたとして、配水は通常毎秒何トンか。

(回答)

流入量、放流量、貯水量などのデータは、ダム管理用制御処理設備に記録されたものをそのまま転記したものであり、それぞれのデータの精度等については、現時点では不明です。

なお、7月7日にも利水者による取水は行われていましたが、その量は毎秒0.6立方メートル程度です。

